

端野の教育 (その5)

川向尋常小学校

川向地区には、明治三八（一九〇五）年から入植が始まり、同四五（一九一三）年末には約五〇戸が入植し、学齢の児童は二〇人ほどいました。

当時、小学校への通学は端野尋常高等小学校か野付牛尋常高等小学校（現在の北見市ハツカ記念館付近にありました）でした。このころ、常呂川には橋はなく道路といっても草や木を刈り分けた程度のもので、常呂川を渡るのは丸木船や箱船で、子どもたちの通学には危険が伴いましたが、この危険もかえりみず端野、野付牛の小学校に通学していました。

大正時代に入り移住者が急増し、学齢の児童、生徒の増加に伴い、地区住民の方々が一体となって学校設置の運動を展開し、何年か見送られましたが、大正五（一九一六）年四月一日、野付牛尋常高等小学校附属川向教授場の認可を受けることができました。

校舎は、南四線東七号（現在の道道北見・緋牛内線東七号付近）に仮設し、一学級編成で同年五月二日開校し、担当は鈴木良吉先生でした。

翌六（一九一七）年四月、通学区域が決められ端野・野付牛尋常高等小学校に通学していた児童（尋常科のみ）は川向教授場に編入されることになり、川東地区の児童は川向教授場に通学するようになったため、児童が急増し一四〇人にも及びました。そのため二学級編成となり、一学級は道道と東一〇号線交点付近にあった嶺牧場の事務所を仮校舎に充て授業が始まりました。

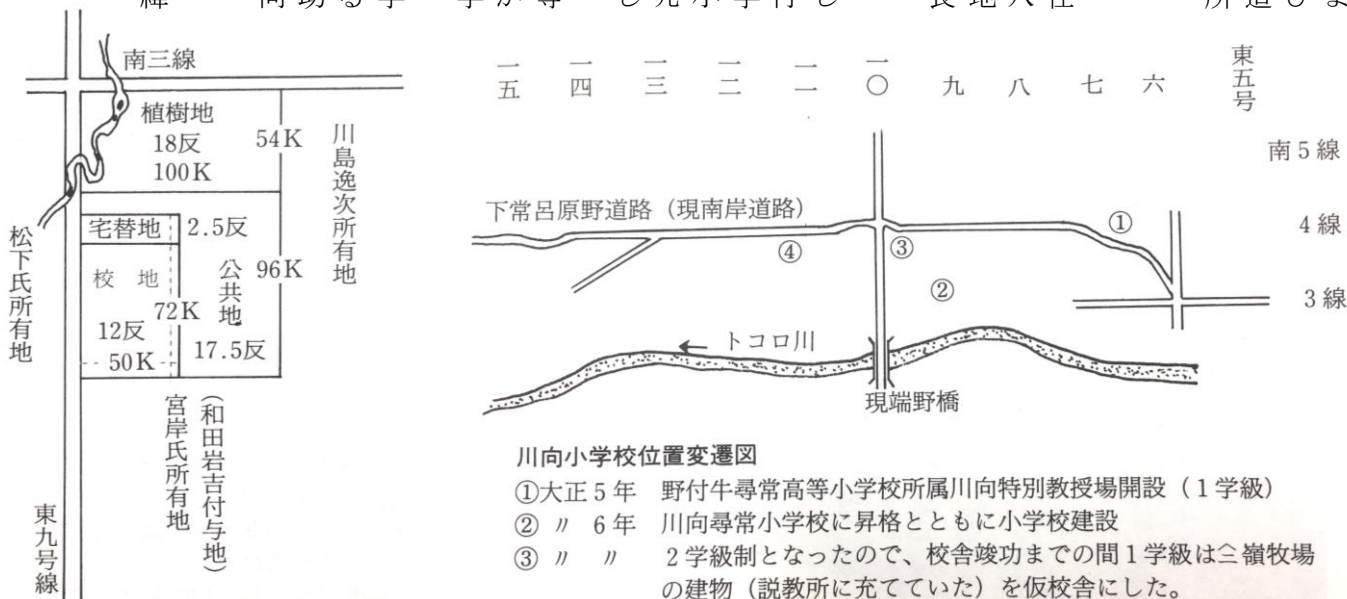
この年、教授場から川向尋常小学校に昇格し、初代校長には鈴木良吉先生が任命され、さらに、同年、校舎を南三線東九号線（現在の川島定則氏住宅付近）に新築移転しました。この校舎は一四八坪（約四三八平方米）、総工費四〇八八円は全て地区住民皆さんの寄付によるもので、新築用材は長谷川鶴次郎氏からの寄贈によるものでした。

川向、川東地区の開拓がさらに進み、同八（一九一九）年には四学級編成となり一教室を増築しましたが、同二〇（一九二二）年四月一日、野付牛町から端野村が分村し、端野村立川向尋常小学校になり、当時野付牛町川東地区から川向尋常小学校に通学していた児童はそのまま昭和二（一九二七）年三月まで、委託教育というなかで通学していました。

翌年四月、野付牛町は新たに川東に東尋常高等小学校附属川東教授場を開校したため委託教育が打ち切れ、川向尋常小学校の児童数が急減し二学級編成になりました。

川東地区から通学しなくなったことにより、学校の位置があまりにも野付牛町に寄りすぎていることから、昭和三（一九二八）年、長谷川佐之助氏の寄付により、川向の中心地である現在の川向文化センター付近に移設新築することに決定し、同年九月完成しました。

なお、川向教授場時代からの校舎の移転の経緯図は、次に記載のとおりです。



川向小学校位置変遷図

- ①大正5年 野付牛尋常高等小学校所属川向特別教授場開設（1学級）
- ② // 6年 川向尋常小学校に昇格とともに小学校建設
- ③ // // 2学級制となったので、校舎竣工までの間1学級は嶺牧場の建物（説教所に充てていた）を仮校舎にした。
- ④昭和3年 分村後児童数の急増により、昭和2年4月、川向第2教授場（協和）を開設し、本校は翌3年南4線東11号に移転改築した。

大正6年川向尋常小学校建設位置図
（『川向部落史』より）

その後、昭和一六（一九四一）年四月、国民学校令により尋常小学校が「国民学校」に改称されましたが、この年に「高等科」を併置し、以来幾多の教育改革を経て、昭和五一（一九七六）年三月端野小学校と統合するまでの間、児童生徒の教育はもちろんのこと、地域づくりの拠点とした多くの人材を世に送り、七五年の幕を閉じました。

協和尋常小学校

協和地区の子どもたちの通学する学校は端野尋常高等小学校でした。道路は悪く、常呂川に架けられた橋は大雨ごとに流失し、渡し船や鉄道の鉄橋を渡り通学したものでした。

大正末期ごろになってから、雪が解け始める四月に入ってから星牧場（現在の協和文化センター付近）の事務所を借り、本校（端野尋常高等小学校）から先生がきて、低学年の児童を対象に出張授業が行われるようになりました。

しかし、協和地区の方々の願いは協和地区に学校を一刻でも早く設置してもらうことでした。

このような機運の中、当時、星牧場を管理していた水野宗太郎氏は、学校用地を牧場事務所付近にすることとし、有志の方々と共に村に対し学校設置を強く働きかけました。

このような、運動を進めていた大正一四（一九二五）年四月一日、端野の学校に通学中の児童二人が季節はずれの大雪のため鉄橋を渡り登校中列車事故により亡くなるという悲惨な事故があり、学校設置の機運が急速に高まりました。

翌一五（一九二六）年、教授場の設置の許可を得て、地区の方々や青年団員の奉仕により、三〇坪の校舎と一八坪の教員住宅が一ヶ月足らずで完成し、昭和二（一九二七）年四月一日、端野尋常高等小学校附属川向第二教授場として開校しまし

た。場所は現在の農業者レクリエーションセンター付近でした。

児童は一年生から四年生までの四五人で、一学級編成、担当は川岡正之先生でした。なお、五、六年生と高等科の児童生徒はこれまでどおり端野本校に通学しました。

また、校名が「川向第二」というのは、当時、協和地区を「川向第二部」と公称していたためです。

その後、昭和一一（一九三六）年五月二〇日協和尋常小学校に昇格し、初代校長には上野義誠先生が就任しました。

以来、校舎の増築や戦前戦後の学制改革を経て、昭和五一年三月、端野小学校と統合するまでの五〇年間、子どもたちの教育はもちろんのこと、

地域づくりや活動の拠点として大きな役割を担ってきました。

なお、教授場に赴任された川岡先生は剣道二段で、野付牛地区の大会で有段者の部で優勝するという腕前であり、教授場に赴任されて以来子どもたちや地域の方々の剣道の指導をされ、これが協和剣道の始まりです。

▼協和尋常小学校昇格時の教職員（昭和11年写）



思い出 尾谷 清美

（大正一五年端野尋常・高等科卒業）

：小学校に入学したのは大正七年四月一日、それはポトポトと綿雪の降る日でした。

協和から、私は父母の付添いも受けず、唯一人木綿の着物にツマゴを履いて、風呂敷包を斜めに背負い、その上にマントを着て、道もなく完全な橋もかかっていない片道五キロの道をトポトポと歩いて入学しました。

大正八年に新しい校舎ができ、そのときのうれしさが今もさまざまとよみがえってきます。新校舎に入って喜んだのもつかの間、はつきり覚えていないが、大正八年か九年の五月だったと思いますが、暴風が吹き荒れて、私たちは外に避難をしグラウンドにかたまっていたが、突風により一、二年生の教室と廊下が吹き倒され崩壊しました。あのときの恐ろしさはいまだに記憶にはつきり残っています。

また、忘れもしない大正一四年四月一日、その日は季節はずれの大雪でした。私はスキーを歩いて鉄橋を渡って学校に行きましたが、その後で後輩二人が、鉄橋で上り列車にひかれてかわいそうな最期をとげました。

その後、部落から運動をおこし、昭和二年協和に教授場を設けてもらうようになりました。これが協和小学校の前身です。

（端野小学校「78年のあゆみ」から要約）